プレゼンテーションスキル向上のための実践・研究（美術科）
～SSH「メディア虎の穴」セミナーと関連して～

筑波大学附属駒場中・高等学校　技芸科
土井　宏之・植村　　徹・小宮　一浩
渡邉　隆昌

プレゼンテーションスキル向上のための実践・研究（美術科）
～SSH「メディア虎の穴」セミナーと関連して～

筑波大学附属駒場中・高等学校　技芸科
土井　宏之・植村　　徹・小宮　一浩
渡邉　隆昌

要約

技術・家庭科、芸術科は2017年度指定４期目のSSH研究開発の柱の１つである「科学者・技術者としての研究活動に必要な情報収集能力・メディア活用能力の育成」を３期目SSHより担い、「メディア虎の穴」という連続セミナーを運営している。美術科もそのシリーズセミナーの１講座を担当しており、具体的には、音楽科と共同で、セミナー受講生徒によるプレゼン資料作成にあたり、美術科は、効果的な視覚効果、ビジュアルエフェクトの向上に資するような講義、助言を行っている。同様の取り組みを、美術教科の学習でも実践することにより、相乗効果を狙うとともに、教材の一層の発展を狙うものである。本年度は、美術科が主体となって実践・研究を行うが、技術・芸術科全体の支援を受けて進めてゆく。美術科に限らない様々な要素・解決方法を教科プロジェクトとして集積し、SSH「メディア虎の穴」連続セミナーに資するものとしたい。

キーワード：視覚的効果、プレゼンテーション、共同作業

1　はじめに

2012 年度に指定された本校３期目のスーパーサイエンスハイスクール研究開発において、本校技術・家庭科、芸術科は研究開発の柱（iii）「科学者・技術者としての研究活動に必要な情報収集能力・メディア活用能力の育成」を担い、5 年間の研究実践を行い、シリーズセミナー「メディア虎の穴」を企画・運営してきた。「メディア虎の穴」では「プレゼンテーションスキルの向上」、「情報収集能力の向上」を中心にシリーズセミナーを実施してきたが、美術科もそのシリーズセミナーの１講座を担当した。具体的には、音楽科と共同で、セミナー受講生徒によるプレゼン資料作成にあたり、美術科は、効果的な視覚効果、ビジュアルエフェクトの向上に資するような講義、助言を行った。この取り組みは、2017 年度指定４期目の SSH 研究開発においても継続してゆくが、同様の取り組みを、美術教科の学習でも実践することにより、相乗効果を狙うとともに、教材の一層の発展を狙うものである。

本稿では、３期目のスーパーサイエンスハイスクール研究開発における美術科の実践を報告するとともに、本年度、中学３年生対象の総合学習のうち少人数選択制による「テーマ学習」の１講座「言葉と映像の世界」において同様の実践を行った報告をするとともに、今後の見通しと課題を検証したい。

2　「メディア虎の穴」における美術科の実践

シリーズセミナー「メディア虎の穴」は、2012 年度から 5 年間にわたり取り組みがなされてきたが、大枠は初年度より変わらず実施されており、講師として、日本マイクロソフト株式会社から複数の専門家に協力をいただき、さらにグリー株式会社の実務家、東北大学の先生にもお願いした。

本校からの講師としては、学校司書が１講座、音楽科の小宮と、美術科の土井が共同で１講座を担当した。

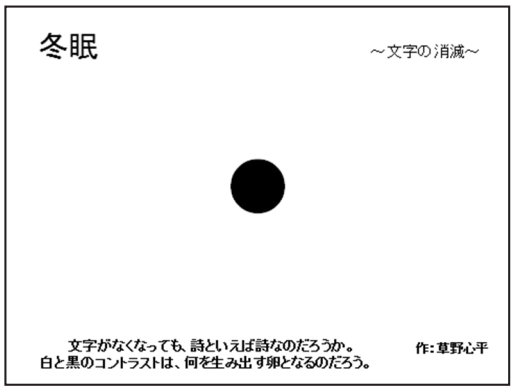
ここでは、音楽科小宮と、美術科土井が共同で担当した講座における美術科の実践の概要を報告する。

全 14 講座うちの中盤８番目として、受講生に対し３時間程度の作業を伴う講座として開講した。受講生への課題は、プレゼンテーションツールとして Power Point を用いて、「校内花壇の第三者への効果的な紹介」の資料を 4～5 名のグループで作成するというものである。この講座のキーワードとしては、「共同作業」「サ

①

②

③



ウンドエフェクト」「BGM」「ビジュアルエフェクト」「色の配置」などがあげられ、美術科としては、効果的な「ビジュアルエフェクト」「色の配置」さらには、「レイアウト」などについて講義、助言を行った。受講生に視覚的に理解、認識してもらうために、教材として、過去の高校２年生徒制作によるプレゼン資料の一部を、原本と、筆者による改善例として示す資料を作成した。本ページ左、上が、筆者が作成した教材資料の一部スライドである。①②③各々、前者が生徒作成、後者が必者による改善例である。

①「名所江戸百景 亀戸梅屋敷」②「アフリカ美術の傾向」は、図および文字の情報量と見やすさを考慮した最適なバランスの改善、図のカラートーンを考慮した、背景色の選択の改善例。

③「冬眠」は、図と説明文との明確な分離を意図した改善例。

生徒がPower Pointを用いて資料を制作する際、当然、パソコンのディスプレイを前に作成するのであり、自身の目から50～60㎝程度の距離に画面があり、プレゼンの際にどの程度の広さのスペースで、何人の聴衆を前に見せるのかということをあまり意識せずに作成することが多いと考えられる。特に、聴衆とスクリー

ンの距離、スクリーンの大きさは重要な要素である。より良いスライドを作成しようとするあまり、１枚のスライドに情報を詰め込みすぎる、文章が長くなり文字が小さくなる、その分、図版の占める面積が狭くなり、図版の細部が見えにくくなるなどを、よくあることであると認識させる。また、最も見せたい図版と、それを補足する情報（タイトル、小見出し、解説など）を明確に分離し、聴衆を意識したスライドにさせる。Power Point のツールが多岐、多様にわたるため、背景などについ余計なデザインや色調を使ってしまい結果的に見えにくくなってしまうことがあることも認識させる。以上のことを意識するだけで、劇的に改善するものである。

3　「テーマ学習」における美術科の実践

3.1　資料教材

中学３年生対象の総合学習のうち少人数選択制による「テーマ学習」では、美術科は、10 年以上にわたり国語と共同して、１講座「言葉と映像の世界」を担当している。この講座は、年間およそ６日程度、のべ時間数実質 20 時間程度である。受講生は、３名程度から、20 名程度と年度により幅がある。生徒は、個人ないしはグループで、言葉（詩・散文）と映像（静止画）を用いて、作品を造り、最終的には、詩（散文）の朗読とプロジェクタによる映像の組み合わせによる作品発表（演示）を行う。映像は、基本的に静止画像の集積で、プレゼンテーションツールとして Power Point を用いることになる。前項で述べたシリーズセミナー「メディア虎の穴」における資料作成に比べ、資料性よりも芸術性が要求されるスライド作成が望まれる。各スライドの全画面が文字や背景も含め各々１枚の作品であり、美術的な感性をもって構成されるものである。したがって「メディア虎の穴」の講座において指摘した事項に加えて、種々の指導ポイントがある。

①写真画像の画面への入れ方、トリミング、色調加工、トーン加工、縁加工等々。
②地（背景）を残した場合の背景の色、デザイン等々。
③文字を入れる場合の配置、向き、書体、大きさ等々。
④画面切り替えの工夫や、アニメーション機能使用の是非。

上記のような指導ポイントに沿って、「メディア虎の穴」の講座時と同様、生徒に提示する教材資料を作成した。前ページ右及び本ページ左が、筆者が作成した教材資料の一部スライドである。いずれも、前者が

①

②

③

④

生徒作成、後者が必者による改善例である。

①は、主たるモチーフである写真画像の入れ方、スマートフォンで撮影した画像であるため、縦長であり、それを生かしたレイアウトではあるが、写真の細部をある程度は見せるために大きめに入れたほうがよいと考えた改善例である。写真の縁の処理については、好みの問題としてよいと考える。

②は、①同様スマートフォンで撮影した画像を使用し、縦方向に目いっぱい配置しており、全体の構成は良いと思われる。書体を検討して、より写真が生かせる、写真を目立たせるものに変えた、改善例。

③は、写真を全画面で見せており、その中に文字を入れ込む場合の例。写真の雰囲気を損なわないように、文字の配置、大きさ、色を考慮した改善例。

④は、背景を残して地に文字を入れていたものを、写真を大きく見せるために全画面にして、その中に文字を入れた改善例。

③、④ともに、写真に文字をかぶせても写真の雰囲気や意味を損なわないという判断で、できる限り大きく見せることを意図している。

3.2　年間指導計画・学習活動

「指導計画」

第１回　6/17　2h

講座の学習、活動内容の理解、事前提示課題の提示、練習用素材（詩）の理解、Power　Point（プレゼンテーションソフト）等の理解、　「写真の今」概説

夏休み　　＜練習作品の制作＞

第２回　9/16　2h

練習作品発表、相互評価

第３回　9/30　2h

生徒過去作品鑑賞、 作品制作の進め方、考え方の理解（参考作品に基づき）

第４回　10/21　3h

校内撮影、発表会

第５回　11/25　　4h

指導者作成資料による学習、関連作品鑑賞、 本制作進行状況確認

〈校外活動〉　12/15

現像体験　（東京都写真美術館）

冬休み　　＜本作品のための撮影等＞

第６回　1/20　4h

作品発表（演示）

画像、詩テキストデータ提出

授業評価のためのアンケート調査

「本作品制作の進め方」
１．テーマ、主題を決める
２．詩、散文を作る
３．撮影をする
４．２・３を平行して行い、編集しながら詩の推敲も

「学習活動」
第１回
半年間の講座の学習内容、自分たちの活動内容を配布プリントを参照しながら理解する。教師が編集した「写真の今」を、鑑賞し、デジタル画像以前の写真について理解することによって､制作の動機付けをする。本制作を前に練習課題について理解する。
国語教師より、練習作品制作のための練習用素材・「詩」の提示を受け、更に各々の詩について解説を受ける。第２回の授業時までに練習作品を完成させてくる。
第２回
練習作品の 発表を行い、生徒同士相互評価し、教師もコメントする。
第３回
生徒の過去の参考作品を鑑賞し、最終的な作品の発表、提出方法について理解する。
第４回
校内撮影を行い、その後発表会を行う。撮影に関する、様々なテクニック、ポイントを理解する。
第５回
指導者作成資料による学習を行う。あわせて、関連作品の鑑賞、 本作品進行状況の確認をする。
第６回
最終作品発表（演示）・画像、詩テキストデータ提出

3.3　本時の指導

「学習指導案」
指導者　関口(国語科)　土井(美術科)
１．題材名「言葉と映像の世界」第５次
美術的要素の学習・関連作品鑑賞
２．日時　　11 月 25 日　1～4 時間目
３．対象学級　中学３年テーマ学習本講座選択者９名
４．指導目標
・指導者作成による資料により、生徒達が効果的なスライドを創れるようにする。
・作家による関連作品を鑑賞して、自身の制作の参考にできるようにする。

５．準備
資料（Power Point による）、関連作品（DVD 他）
パソコン、プロジェクタ、
６．指導計画

時間	学　習　活　動	指導上の留意点
導入 10 分	･本時の全体の流れ及び本時の目的を理解する	
展開① 40 分	･過去の生徒作品と指導者によるその改善例を比較して見ることにより､効果的なスライド作成について学習する	・わかりやすくかつ多様な例を準備する
展開② 50 分	･関連作品①を鑑賞する	・「詩のボクシング」鑑賞により、パフォーマンスを伴った詩の朗読を理解させる
展開③ 50 分	･関連作品②を鑑賞する	・「花曲 4」(荒木経惟) 鑑賞により、静止画をつないで動画として見せる手法を理解させる
展開④ 30 分	・本制作進行状況確認	・完成までの見通しを立てさせる
まとめ 10 分	･本時の内容を振り返る ･次回までの課題を確認する	・本時のねらいが理解できるようにする ・本時の学習、鑑賞をふまえて、作品を更に創り込めるようにする

７．評価
・指導者作成による資料により、生徒達が効果的なスライド作成について理解したか。
・作家による関連作品を鑑賞が、生徒の制作の参考になったか。

3.4　事後アンケート

最後に「言葉と映像の世界」全体を通して受講者にアンケートを実施した。自由記述3項目、数量回答13項目、選択回答5項目について質問した。自分の制作及び、講座に対する自己評価や満足度について数値集計を行い、講座内容の補充、改善への参考とした。本稿では本実践に関係する1部の数量回答、選択回答の集計結果のみを紹介し、評価する。なお、回答数は、受講者全員、9名分であるが、一部設問について無回答のものもあった。

【質問1】何を基準にして、本講座を選択しましたか。（複数回答可）
①興味・関心があるから　7
②得意分野だから　2
③不得意分野だから　0
④担当教師　0
⑤友人が選択するから　2
⑥その他　＜具体的理由を記入＞　0

【質問2】上の質問に関して、どの要素に関してそう考えましたか。（複数回答可）
①美術的要素　5
②国語的要素　3
③デジタル機器の使用　3

【質問3】デジタル機器を使用して創作（作品制作）をする事に対する興味・関心は、受講前と比較して変化しましたか。
①高まった　9
②あまり変わらない　0
③低下した　0

【質問4】学習、制作の中心は何でしたか。（複数回答可）
①美術的要素（図像処理、構成等）　5
②国語的要素（詩作、解釈等）　1
③デジタル機器の使用　6

【質問5】講座のどの内容が自身の制作の参考になりましたか。（複数回答可）
①最初の課題（既存の詩に写真をつける）　5
②過去の生徒作品鑑賞　4
③校内撮影会　3
④生徒作品の改善例　2
⑤関連作品鑑賞　3

【質問6】教師から多くのことを学ぶことができましたか。
①通常の授業以上に　3
②通常の授業と同程度に　6
③通常の授業以下　0

【質問7】「生徒作品の比較・改善例」はスライド作成の参考になりましたか。
（7-1）　写真画像のスライド画面への入れ方、大きさ、背景の有無、色など
①とても参考になった　3
②多少参考になった　5
③どちらともいえない　0
④あまり参考にならなかった　0
⑤全く参考にならなかった　0
（7-2）　文字の配置、書体による印象の変化
①とても参考になった　6
②多少参考になった　2
③どちらともいえない　0
④あまり参考にならなかった　0
⑤全く参考にならなかった　0
（7-3）　スライド同士の関連性、作品全体の統一感、リズムなど
①とても参考になった　5
②多少参考になった　3
③どちらともいえない　0
④あまり参考にならなかった　0
⑤全く参考にならなかった　0
（7-4）　画面切り替えやアニメーション機能による印象の変化
①とても参考になった　2
②多少参考になった　4
③どちらともいえない　2
④あまり参考にならなかった　0
⑤全く参考にならなかった　0

3.5　アンケート結果とその評価

【質問1】から本講座受講動機を見ると、「興味・関心があるから」を選択するのは、当然であろう。【質問2】で「デジタル機器の使用」よりも「美術的要素」を望んでの受講は、意外であったが、美術的側面の指導助言を期待されているということでもある。【質問3】から、デジタル機器使用に関し、講座の受講を重ねることよって興味関心が高まったと全員が回答していることは、この観点については、講座の内容が適切であ

ると評価してよいであろう。【質問 4】の結果は、【質問 2】の結果と対応しており、さらに、【質問 3】の結果とも合致している。【質問 5】において本稿の実践・研究の主眼とかかわる「生徒作品の改善例」の選択数が「2」と少ないのは残念であるが、決して「生徒作品の改善例」が生徒にとって有用でなかったわけではなく、他の回の内容のほうがより魅力的であったとも解釈できる。そのことは、最後の【質問 7】の結果を見ると、ほぼすべての観点で、全員が「生徒作品の比較・改善例」がスライド作成に、「とても」あるいは、「多少」参考になったと回答していることから読み取れる。

4 本実践・研究の今後の展開

本実践は本校 SSH の取り組みの一部とかかわりながら、美術科が国語科教員と共同で進めている中３総合学習「テーマ学習」の講座の一部でもある。将来的には中学校美術科や高等学校芸術科・美術、さらには、高等学校課題研究においても生かすことができると考えている。

いずれの枠組みにおいても、最終的な作品「成果物の明確な設定」が学習の達成には効果的であり、かつ必要だと考えている。

【参考文献】

1. 植村徹・小宮一浩・土井宏之・渡邉隆昌.（2016）. 生徒の学習を支えるクラウド環境の整備-SSH シリーズセミナー「メディア虎の穴」受講生環境の構築を通して-.『筑波大学附属駒場論集』, Vol.55, pp.65-76.
2. 植村徹.（2016）.（ⅲ）科学者・技術者としての研究活動に必要な情報収集能力・メディア活用能力の育成. 著：筑波大学附属駒場高等学校, 平成 24（2012）年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書・第四年次（pp.17-18）.